

Title	変わりゆく日系社会 : ヒロシ・カシワギの作品に見る日系アメリカ社会
Author(s)	松本, ユキ
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2012 P.13-P.22
Issue Date	2013-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/77382
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

変わりゆく日系社会

——ヒロシ・カシワギの作品に見る日系アメリカ社会——

松本 ユキ

1. 日系コミュニティとの出会い

2013年1月31日、ヒロシ・カシワギ(1922-)はサンフランシスコのハーブスト劇場に現れた。フレッド・コレマツの日¹を祝う式典に参加するためである。黒いスーツにシャキッとした姿勢で壇上に立つ彼の姿は俳優の舞台挨拶を思わせた。柏木は日系俳優²としても広く知られているが、強制収容の経験を世に伝える語り部として、日系アメリカ人の市民権をかけて立ち上がった英雄の一人としての功績を称えられ、この日の式典で表彰された。

日系アメリカ人の二世たちは第二次世界大戦の経験を共有しているが、その経験は一樣ではない。米国兵士として戦った者、徴兵に反対した者、ノー・ノー・ボーイ³と呼ばれた者。日系社会の対立を超えて式典では異なる立場をとった二世すべての功績を称えた。

青年期に強制収容を経験した二世のほとんどは既に80代、90代を迎えている。またアメリカ人として生まれ育ったにも関わらず、アメリカ社会から敵国のスパイとして汚名を着せられ、財産や土地を奪われ、十分な説明もないまま見知らぬ場所での生活を強いられた経験は、多くの二世に恥辱を与え、彼らの口を閉ざし、傷痕を残した。しかしながら、アメリカが同じ過ちを繰り返さないよう収容所の経験を語ろうとする二世もいる。柏木もその一人である。

次に柏木と面会したのは、2013年の2月17日、サンフランシスコの日本町で行われた追悼記念日 (Day of Remembrance)⁴に参加した時であった。式典は歌舞伎劇場にて行われた。この日のハイライトはそれぞれの収容所の名前が書かれた監視塔のレプリカの前で

¹ フレッド・コレマツは日系人の強制収容に異議を唱え、最高裁で日系人収容の違憲性を訴えた。コレマツの誕生日である1月30日は彼やその他の市民権活動家の功績を称える日である。

² 舞台での活躍はもちろんのこと、映画にも出演している。出演作は、『ヒトハタ』『ブラックレイン』など。

³ ノー・ノー・ボーイとは、1943年収容所で17歳以上の日系人全員を対象に行われた二つの質問(27項:アメリカ軍への徴兵に応じるかどうか、28項:アメリカへの無条件の忠誠を誓うか)に対しノーと答えた者のこと。

⁴ 1942年2月19日、フランクリン・D・ルーズベルト大統領は西海岸の日系人の強制収容を命じる大統領命令第9066号に署名した。毎年、この日が近づくと、各地の日系コミュニティでDay of Remembranceが催される。

お清めの儀式を行い、その後に各収容所に関連のある人物が代表して蠟燭を灯すというものである。式典に参加していた人の多くは、日系の二世あるいは三世であったように思うが、世代や民族を超えて多くの人が訪れた。9・11以降のアラブ系アメリカ社会と日系社会の連帯⁵や未だ現在進行中のラテンアメリカの日系人⁶の補償問題など今後の日系社会の展望について大いに考えさせられた。

2. ヒロシ・カシワギとの出会い

フレッド・コレマツの日、式典の後に、ロビーへ出ると、柏木はメディアからの取材を受けていた。取材が終わると、私は柏木に日本からの留学生であることを説明し、インタビューに応じてもらえないか頼んだ。そしてパークレーで日系アメリカ人の歴史に関する授業を受講し、彼の戯曲を読んだことを伝えた。私が大阪から来たことを知ると、柏木は笑顔になり、両親が和歌山出身であること、鯖のなれ寿司を作るのが得意なことを話してくれた。

柏木によると、コレマツの日に表彰されたことは、彼のように第二次世界大戦中にツールレイクに収容された者にとって、「敵国者」として汚名につきまといわれ日系のコミュニティーからも追放された者にとって、とても重要なことだという。⁷今まで沈黙させられてきたものにとって、自分たちの行動が正しいことであり誇らしいことであったことが認められることは非常に重要な意味を持っている。

次にバイエリアの追悼記念日に柏木に会ったときには、よりリラックスした雰囲気ですぐ友人との談話を楽しんでいた。追悼記念日は、過去の未解決の問題について現在の考えを述べ、未来に同じことがおきないように働きかける場である。この日朗読されたジャニス・ミリキタニやキク・フナビキの詩にあったように、柏木は、沈黙を破って、自分たちの経験を人々に伝えることの責任を今なお感じている。柏木は追悼記念日に参加した感想を以下のように述べた。

国防権限法 (NDAA) の可決により、第二次世界大戦中に日系人に起こったことは再び起こりうる状況となった。バイエリアの追悼記念日が、日系ペルー人の賠償問題や NDAA の脅威など未解決の問題について触れ、行動をよびかけたことは、特に意味のあることだと感じた。⁸

⁵ 式典では、Arab American Action Network の代表者が9・11以降の人権問題について語った。

⁶ 1988年、アメリカ政府は日系人の強制収容について正式に謝罪し、一人あたり二万ドルの賠償金が支払われることになった(Ueunten 92)。しかしながら、戦時中アメリカへ強制的に連れてこられたラテンアメリカの日系人は未だ正式な補償を受けていない。式典には日系ラテンアメリカ人の補償運動を勧めているグレース・シミズが現状について報告し、収容を体験したアート・シバヤマのドキュメンタリーが上演された。

⁷ 筆者によるインタビュー。2013年2月22日、11項目の質問に対してメールで返答を頂いた。

⁸ 筆者によるインタビュー。

収容所での経験について語ることは決して容易いことではないし、日系人強制収容所の歴史を思い出すことはただ単に過去のことではない。変わりゆく日系社会にとって強制収容の歴史を語り続けることはとても骨の折れる問題である。二世、三世から新しい世代へ、日系アメリカ人からより広い意味での日系社会へそしてアメリカの社会全体へとその歴史的経験を広めていく必要がある。その意味で、今なお強制収容の歴史について語り、当時の日系アメリカ人社会を作品の中で伝えてくれる柏木の存在は重要である。

彼の作品はいくつかのアジア系アメリカ作品集に収録されている。*Ayumi: A Japanese American Anthology* (1980) には、“Hair Cut” “Tofu” “A Meeting at Tule Lake”などの詩が収められている。*The Big Aiiieeeee!* (1991) には、戯曲 “Laughter and False Teeth”が収録されている。

最初に彼の作品に触れたのは *Only What We Could Carry* (2000) という日系人の収容所体験に関する作品集に収録された戯曲 “The Betrayed”を読んだときである。そのあと、日系三世の友人から彼の戯曲集 *Shoe Box Plays* (2008) とエッセイ集 *Swimming in the American* (2005) を借りて読んだことが彼の作品について更に知るきっかけとなった。その他、柏木は詩集 *Ocean Beach* (2010) を出版している。

柏木は、俳優として、詩人として、劇作家として幅広い分野での活躍を続けているが、本稿では特に彼と演劇との関わりに注目し、彼の作品における日系アメリカ社会について分析したい。

3. 演劇との出会い： *The Plums Can Wait*

柏木は書くことと同時に演じることを始めた。柏木によると、彼が演劇を始めたのは10代のころで、日本語学校で終業式の演目を演じたのが最初の演技経験である。⁹ ツールレイクでも劇団が結成されることを知ると俳優として Little Theater に参加した。収容所内で、日系人の観客を前に演じた体験について柏木は別のインタビューの中で以下のように語っている。¹⁰

あまり生の演劇に触れる機会のなかった観客にとって、収容所での演劇は新鮮な刺激を与えたようである。柏木はこの頃からすでに、日系のコミュニティーを対象とした演劇を演じることに情熱を注いでいたのだろう。しかし、自作の演劇を創作することはなく、いつも白人の役を演じることへの不満もあった。また、忠誠登録の質問をめぐって劇団の中でも意見の対立が起こり、演劇への関心も次第に薄れていったと語っている。

このように、柏木の演技への情熱は日本語学校や収容所内での劇団を通じて培われた。柏木は終始一貫して、日系の観客の前で演じることを、そして自分たちのための演劇を創作することへの関心を持っていたようだ。収容所から解放されると柏木はそれを実行にうつ

⁹ 筆者によるインタビュー。

¹⁰ <http://www.tellingstories.org/internment/hkashiwagi/index.html> (2005年5月3日に行われたインタビューと2006年4月27日にフォローアップ・インタビュー)。

した。

1948年にロスで、ツールレイクの日本語教室での友人 Hiroataka Okubo に再会したことがきっかけとなり、柏木は友人とともに Nisei Experimental Group という劇団を結成した。そこで人生で初めて書いた戯曲が *The Plums Can Wait* である。柏木は以前から、日系アメリカ人の観客の前で、日系アメリカ人の俳優によって演じられる、日系アメリカ人の体験についての戯曲を書くことに興味があったという。¹¹ *The Plums Can Wait* は1949年にロスで初演され、1951年にはサンフランシスコとバークレーで上演された。

The Plums Can Wait は収容所を出た直後に柏木の家族に起こった出来事に基づいて書かれている。白人の経営する農園に住み込みで働く日系の母親と二人の兄弟の話だが、白人経営者の人種差別から生じた誤解により農園を去るべきかどうかをめぐって、兄弟は対立する。最後に二人の息子の喧嘩を仲裁するのは一世の母親である。

劇中で息子の Tom と George は英語を話しているが、一世の母親はほとんど日本語を話している。二世の息子によって描かれる一世の母親の姿はとても新鮮で生き生きとしている。そして日本語と英語で交わされる日常の何気ない親子の会話は当時の日系アメリカ社会を見事に再現している。

1975年、*The Plums Can Wait* は新たに脚光を浴びることになる。当時は日系アメリカ人が自分たちのアイデンティティを模索していた時期であり、*The Plums Can Wait* はサンフランシスコの Center for Japanese American Studies 主催の会議で上演されることになった。二世や三世の観客にとって、日系アメリカ人の俳優によって演じられる自分たちの経験を描いた演劇を見ることはとても感動的な瞬間であったという。¹²

1976年にはサンマテオとサンフランシスコで再演されている。特にサンフランシスコでは、大晦日に学校で行われる年越し祭りの余興として、太鼓、詩、踊り、尺八などとともに演劇が上演されていることは興味深い。¹³ 70年代以降に柏木の演劇が日系アメリカ人のコミュニティで自分たちのための演目として定着していった様子が伺える。

4. 日系社会における助け合い : *Live Oak Store*

The Plums Can Wait は、収容所を出た後の経験を基に書かれたものだが、*Live Oak Store* は、収容所へ行く前の日系社会の様子を描いている。この演劇は、1983年の5月13日から6月26日までサンフランシスコの Asian American Theater Company によって演じられた。

演劇の舞台となっている1930年代は大恐慌により日系社会にとっても経済的に厳しい時代であった。また日本の植民地支配がアジアに拡大するにつれて、日系アメリカ人への風当たりは厳しくなった。この時代に青年期を迎えた二世の多くはアメリカ社会における貧困と人種差別を経験した。

¹¹ 筆者によるインタビュー。

¹² 筆者によるインタビュー。

¹³ San Francisco Center for Japanese American Studies の会報、1976年1月号。（資料は柏木の提供による。）

アメリカ生まれの二世と違って、一世に市民権はなく、土地の所有を認められていなかった。アメリカ社会における人種差別を経験した一世たちは自分たちのコミュニティーや経済基盤を形成することで互いに助け合い厳しい時代を生き延びた。恐慌の時代について柏木は以下のように述べている。

1930年代初めの大恐慌の時代は誰にとっても厳しい時代だった。仕事もなく食べ物もなかったが、田舎に住んでいる人々はまだ恵まれていた。自分たちで野菜、鶏、兎、豚を育てることができたし、山羊のミルクもとれた。私たちの住んでいた地域は、果物を育てていたが、収穫期にはあらゆる種類の果物に恵まれ、残りは冬に備えて保存された。¹⁴

柏木の父親は北カリフォルニアにあるルーミスという町で、食料雑貨品店を経営していた。経営は厳しい状態だったが、幸いなことに食べるものには困らなかったという。日系の農場労働者たちは、自分たちで食物を育てることができたため、他のアメリカ人たちよりも比較的豊かだったが、お米、豆腐、味噌、醤油などの必需品を必要としていた。柏木の両親はこれらの食材を付けて日系人の客に提供していた。しかし、多くの人は期日までに支払をすることができなかった。支払が滞っていたため、柏木の父は卸売業者から店の商品を確保するのに苦労し、現金を工面するための借金が増えていった。¹⁵ また、店には腹をすかせた浮浪者が食べ物を求めて頻繁にやってきたため、柏木の母親は不満を言いつつも無償で食べ物を提供するしかなかった。*Live Oak Store* は、このような柏木の家族の体験を基に、厳しい時代をいかにして助け合いの精神で生き延びたかを描いている。

またこの作品では、日系社会での助け合いとともに、アメリカ社会において日系人が経験した人種差別についても言及している。ある日、食料品店を経営する日系の一家は、同じ町で食料雑貨店を営む白人から手紙を受け取る。英語を読むことのできない父親は、息子の Masato に手紙の内容を翻訳してもらおう。手紙は、この町の白人経営者たちを代表して、店を6時まで閉店することと日曜日に店を閉めることを要求するものだった。「キリスト教徒の町で安息日に商売をしてほしくない」というのが白人経営者の主張だったが、日系人の商売を妨害する意図があるのは明らかだった。結局、父親の Frank はこの手紙を無視して、日系人の客のために日曜日でも店を開けることにする。この手紙をめぐる、二世の息子 Masato はアメリカ社会と日系社会の対立の中間におかれることとなる。

この話は柏木の家族の実体験を基にしている。Mr. Swift という白人の経営者が、日曜日の営業を停止するように伝えるために店にやってきた時、彼と父親の会話を取持ったのは柏木だった。柏木の父親にとってみれば、日系人の客は白人の店にはほとんど行かなかったし、客の大半は農場労働者だったので日曜日しか店に来られないというのが言い分だっ

¹⁴ Hiroshi, Kashiwagi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*, 25.

¹⁵ Hiroshi, Kashiwagi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*, 26.

たが、英語が流暢でない一世の父親はそれをうまく伝えることができなかつた。¹⁶父親が Mr. Swift の要求を断ると、Mr. Swift は柏木の父親は英語が理解できていないのだと考え、息子の柏木にうまく要求を伝えるよう言い残して帰っていった。

一世がアメリカ社会で経験した人種差別や経済的困窮を見て育った二世の多くは、アメリカ社会と日系コミュニティの中間に立たされた。英語が流暢で、アメリカ文化に慣れ親しみ、大学教育を受けたという事実にも関わらず、二世たちはアメリカ社会において一世が経験したのと同じような人種差別や経済的困難に直面することになる。アメリカ人として生まれ育った二世は、一世との世代間の対立を経験したことも確かだが、一世から日系社会における助け合いの精神を学び取った。

このような日系社会での助け合いや連帯は、二世がその後続く厳しい時代を生き延びる際の手助けとなった。*Live Oak Store* においては、厳しい時代においても世代間の対立や文化間の摩擦を超えて互いに助け合うことの大切さを教えてくれる。

5. 日系社会における対立： *The Betrayed*

The Betrayed はツールレイクでの強制収容、忠誠登録をめぐる対立、リドレスなど日系社会が沈黙を守ってきた最も重要な問題に対して正面から取り組んだ意欲作である。

この劇は当初、*A Question of Loyalty* というタイトルの一幕劇として創作された。*A Question of Loyalty* は 1978 年にはスタンフォードで、1979 年にはロスで上演されている。¹⁷ 1980 年の 4 月には、その他の二つの劇 *April Fool*、*Mondai wa Akira* と共に、パークレーの図書館やシニア・センターなどの場所で上演されている。¹⁸ その後、第二幕が書き足され、1990 年の 11 月にサンフランシスコの Tale Spinners Theatre で上演された。この劇は後に、*The Betrayed* というタイトルに改められた。

第一幕は、1943 年のツールレイク収容所が舞台になっている。20 歳の日系アメリカ人の二世 Tak と Grace は収容所で出会い互いに惹かれあうが、忠誠登録をめぐる二人の関係は大きく変化する。

Tak は、田舎出身で、農場労働者として働いてきた両親が、白人から受けた人種差別を見て育ち、アメリカ社会への憤りを感じている。一方、Grace は都会育ちの教養のある洗練された女性である。Tak とは対照的に、中産階級出身でアメリカ文化により慣れ親しんでおり、キリスト教徒の父親の影響でアメリカ人としての誇りや義務を感じている。Tak と Grace は日系アメリカ社会の二つの異なった側面を象徴している。忠誠登録の質問をめぐる二人の対立は顕著なものとなる。

Grace は忠誠登録が日系人のアメリカへの忠誠心を確認し、収容所から解放してくれるものであると肯定的に解釈している。¹⁹ シアトルでホテルを運営していた Grace の父は、

¹⁶ Hiroshi, Kashiwagi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*, 32.

¹⁷ San Francisco Center for Japanese American Studies のプログラム、1998 年 5 月 23 日。

¹⁸ San Francisco Center for Japanese American Studies の会報、1980 年 3 月号。

¹⁹ Hiroshi, Kashiwagi. *Shoe Box Plays*, 207.

真珠湾攻撃の後、FBIに危険分子として連行されたが、それでもなお Grace は父の意思に従い、アメリカに忠誠を誓っている。一方、Tak は市民を刑務所のような場所に収容している政府に憤りを感じ、質問に答えるのを拒否することで、抵抗を示そうとしている。アメリカ人として育ったことに誇りを感じてはいるが、政府による日系人の扱いや日本にいる親戚のことを考えると、自分たちを外国人として扱う政府に忠誠を誓う義務はないと感じている。以下の Tak の台詞は二世がアメリカ人として育ったにも関わらず、常に二級市民として外国人として扱われることへの不満や屈辱をうまく表現している。

Why do we have to prove ourselves over and over again? Aren't we good enough the way we are? I'm sick of saying yes, to everything. Yes, I'll go to the camp. Yes, I'll register. Yes, I'll declare my loyalty. Yes, I'll serve in the Army and prove I'm a loyal, patriotic American.²⁰

国家のために自分の生命をかけて戦うのは勇気がいることだと Grace は主張するが、Tak は自分の権利をかけて戦うことが自らの忠誠心を証明することなのだと反論する。二人の議論は平行線をたどる。

ジェレ・タカハシによると、二世は 1930 年代以降、多様な政治的スタイルを発展させてきた。彼はそれを四つの異なる立場に分類している—1) 東西の橋渡しをする親善大使、2) アメリカ社会への同化、3) 進歩的社会改革を推進する立場、4) アメリカ社会そして日系社会の双方からの孤立。²¹このような二世の多様性は、政治的な混乱の中で多くの対立を生み、時には異なる立場の主張を沈黙させることで日系社会の連帯を示そうとした。

強制収容に対して、日系人が全く抵抗を示すことなく政府の意向に応じたのかどうかをめぐっては、様々な意見がある。JAACL²²は、政府に対して、「建設的協調」(constructive cooperation) という戦略的立場をとったため、個人々の強制収容への抵抗や徴兵の拒否を支持しなかった。結果的にアメリカ政府に対して異議を唱えた者たちは、アメリカ社会からも日系社会からも排除された。劇中の Grace は JAACL に代表される第二の立場に、Tak は多くの帰米が経験した第四の立場に近いといえるだろう。

主人公の Tak と同じく、20 歳の時にツールレイクに収容され忠誠登録の質問にノーと答えた柏木は、アメリカ社会そして日系コミュニティーの双方において裏切り者としての汚名を着せられることになる。

忠誠登録はすべての収容所に衝撃と混乱をもたらしたが、ツールレイクにおいては執行部との対立が激化したことで、人々はより混沌とした危険な状況に置かれた。ツールレイクで忠誠登録に抵抗した六千人のうち、二世は約半分を占めていた。また、従軍に志願したのはたったの 59 人で他の収容所よりもかなり少なかった。²³

²⁰ Hiroshi, Kashiwagi, *Shoe Box Plays*, 214.

²¹ Jere Takahashi, *Nisei/Sansei: Shifting Japanese American Identities and Politics*, 48, 84.

²² Japanese-American Citizens League (日系市民連盟) の略称。

²³ Noboru Shirai, *Tule Lake: An Issei Memoir*, 104.

父親が肺結核を患い病院にいたため、柏木は収容所で、母親、弟、妹のための選択をしなければならなかった。もしイエスと答えると、息子が徴兵され、家族がツールレイク以外の場所に送られることになり、家族が離れ離れになるのではないかと恐れた柏木の母親は、質問に答えることを拒否するよう子供たちに伝えた。しかし、質問に答えなかった者は刑務所に入れられ厳しい刑罰を与えられるという脅迫により、結局は質問に答えることを強いられた。政府がアメリカ市民を敵国外国人として扱い、不公平にも日系人だけを強制収容したことに憤りを感じた柏木は質問にノーと答えた。²⁴ この質問から 35 年後、柏木は忠誠登録が義務的なものではなかったことを初めて聞かされ、政府からの更なる裏切り行為に憤りを感じる。²⁵

第二幕の舞台は、40 年後の 1983 年のフレズノに設定されている。40 年の沈黙を破って、Grace が突如 Tak のもとを訪ねてきたことにより、二人の人生は再び交錯する。久しぶりに再会した二人は自分たちのその後の生活や家族のことについて話す。40 年前の選択により、二人のその後の人生は全く異なる道筋を辿っていた。Tak はフレズノで農場経営者となり、農業組合の会長をつとめていた。Grace はその後より政治的な立場をとるようになり、現在は JACL の進めている補償運動に関わっていた。

40 年を経た今、二人の忠誠登録に対する考えは大きく変化しており、お互いの立場をより尊重できるようになっていた。息子の Tommy がベトナム戦争で戦死したことにより、442 部隊で勇敢に戦った Grace の亡き夫や忠誠登録に対してイエスと答えた Grace に対し、Tak は理解を示すようになっている。

Yeah, I made statement forty years ago when I resisted the registration order and I was called a disloyal American. It wasn't popular but I did it because I had to. Everyone does what he has to do; your husband did what he did and I respect him for it.²⁶

Grace は沈黙を破り、自分の家族がツールレイクで経験した出来事について語る。そして、Tak が他の二世と共に登録を拒否して捕まった²⁷後すぐ、身の安全のために、別の収容所に移ったことを話す。アメリカへの忠誠を誓った Grace の父は、親日派にアメリカの犬と呼ばれ、暴行される。そして、収容所を出てシアトルに戻ったものの、ホテルの事業を失い、周囲の人々に蔑まれるという苦い経験をしていたことが明らかになる。双方の立場が同じように、収容所を出てからも忠誠登録に苦しめられたことを知り、二人は和解にいたる。Grace がリドレス運動に言及すると、Tak は自分に何ができるか考えてみることを約束する。

この劇が創作された 1980 年代には、日系社会がリドレスの問題に積極的に取り組み、今

²⁴ Hiroshi, Kashiwagi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*, 180.

²⁵ Hiroshi, Kashiwagi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*, 174-175.

²⁶ Hiroshi Kashiwagi, *Shoe Box Plays*, 230.

²⁷ 1943 年にツールレイクで実際にあった出来事に言及。30 人余りの二世がアメリカ市民権の放棄と日本への送還を執行部に要求し、逮捕された (Shirai 36)。

まで沈黙を守ってきた二世たちが強制収容について語り始めた時期である。二世たちが、アメリカ政府による市民権侵害や社会的不正義によってもたらされた日系社会の対立を乗り越え、他の世代と共に補償問題に向き合った結果として、現在の日系社会及びアメリカ社会があることを忘れてはならないだろう。

6. 変わりゆく日系社会：多様性にむけて

本稿では、ヒロシ・カシワギの演劇作品に描かれている日系アメリカ社会を通じて、2013年現在の日系社会について考えてきた。世代間の対立と連帯、日系社会における摩擦と和解など、柏木の作品でとりあげられている問題は今日にも通じるものがある。アメリカ社会における人種差別、経済的困難、社会的隔離、戦争、公民権運動など多くの問題と向き合ってきた日系社会の遺産は、今なお重要な意味をもっている。

リドレス運動の努力が1988年の市民自由法として実を結んだ25年後の現在、日系社会は大きく変化している。追悼記念日の式典後、平和の塔の前で、和太鼓の演奏と神主の説教が行われているとき、コスプレをした若者たちが物珍しそうにその様子を見物していた。式典が始まる前に、紀伊国屋センターを見学している時も、コスプレをした若者がアニメのグッズを売っている様子やレストランで日本食を楽しむ人々の姿が目についた。

近年、他のエスニック集団と比べると日系アメリカ人の数は大幅に減少している。また新移民の減少と異人種間結婚の増加により、自らを日系とみなす若者は非常に少なくなっている。2012年秋学期にバークレーで受講した日系アメリカ人の歴史に関する授業は、韓国系、中国系、ベトナム系の学生、そして多民族的な出自を持つ日系の学生で構成されていた。日系の出自を持つ学生たちは、どちらかという、「マルチレイシヤル」や「ハッパ」として自らを位置づける傾向にある。日系社会が、自らの歴史的遺産を民族や国家、世代を超えて引き継いでいくためには、自身の多様性と向き合わなくてはならない。

2013年の現在、日系社会は多様性へと目をむけている。フレッド・コレマツの日には、時代や場所を超えた多様な英雄たちが自らの市民権をかけて闘った功績を称えた。追悼記念日にはアラブ系アメリカ社会との連帯やラテンアメリカの日系人の補償問題など国家や民族を超えた課題が取り上げられた。日系アメリカ社会は「日系」という民族的枠組みや「アメリカ」という国家領域を超えて、更なる広がりを見せている。

更なる多様性へと向かいつつある日系社会だが、過去から現在、未来へと引き継がなくてはならない課題は未だ残されている。ヒロシ・カシワギの作品で描かれている日系の歴史的遺産は、国家や民族、世代を超えて、今後も語り継がれていくであろう。

参考文献

Chan, Jeffery Paul, et al., eds. *The Big Aiiieeeee!: An Anthology of Chinese American and Japanese American Literature*. New York: Meridan, 1991.

- Inada, Lawson Fusao, ed. *Only What We Could Carry: The Japanese American Internment Experience*. Berkeley: Heyday Books, 2000.
- Kashiwagi, Hiroshi. *Swimming in the American: A Memoir and Selected Writings*. San Mateo: Asian American Curriculum Project, 2005.
- . *Shoe Box Plays*. San Mateo: Asian American Curriculum Project, 2008.
- . *Ocean Beach*. San Mateo: Asian American Curriculum Project, 2010.
- Mirikitani, Janice, ed. *Ayumi : A Japanese American Anthology*. San Francisco: Japanese American Anthology Committee, 1980.
- Shirai, Noboru. *Tule Lake: An Issei Memoir*. Sacramento: Muteki Press, 2001.
- Takahashi, Jere. *Nisei/Sansei: Shifting Japanese American Identities and Politics*. Philadelphia: Temple University Press, 1997.
- Ueunten, Wesley. "Japanese Latin American Internment from an Okinawan Perspective." *Okinawa Diaspora*. ed. Ronald Y. Nakasone, Honolulu: University of Hawaii Press, 2002.